

人生100年時代?—令和新時代・ポピュリズムから脱しよう



渡辺利夫

日本の少子高齢化は、もはや歯止めを失つてしまつたようです。人口構成において高齢人口の比率が一方的に増え、高齢者を支える若年人口の比率がみるみる減少をつづけています。

高齢者が生涯を通じて健康を維持し、かつ自立て生活することが可能であれば、それに越したことはありません。しかし、ごく少数の人間を別にすれば、そんなことは幻想に違いありません。

平成二十八年の日本人の平均寿命は、男性八〇・〇歳、女性八七・一歳。これは日本の歴史上の最高水準です。日本より平均寿命の高い国は、男女とも香港のみです。

に少しの変化があれば医師のところに出向き、処方される薬剤をきちんと服用し、万歩計を付けて散歩に精出し、テレビなどで繁く映し出される健康増進のための器具やサプリメントなどの「厄介」になる、そういう人が随分と多いように見受けられます。

それでも、厚労省の調査によりますと、平均寿命と健康寿命の差は、過去一三年の間に男性一・八年、女性一・五年伸びたに過ぎません。今後、健康寿命が伸びるにしても、人間が自然生命体である以上、ここいらが限界だと考えるのが常識というものではないでしょうか。再びですが、日本人の平均寿命はすでに世界で最高レベルに達しているのですから。

OECD（経済協力開発機構）の国際比較調査によりますと、日本人の年間一人当たり医療機関受診回数は世界第二位の一・二・七回です。第二〇位のフランスの六・三回、第二九位のアメリカの四・〇回などに比べて、日本人ははるかに高い頻度で病院に通つていることになります。

厚生労働省は、平均寿命とは別に「健康寿命」という概念を導入しています。「健康上の理由によつて日常生活が制限されることなく維持できる生存期間」のことです。厚労省は三年ごとに健康寿命についての調査を行っています。その調査によりますと、平成二十五年の男性の健康寿命は男性七一・二歳、女性七四・二歳です。平均寿命から健康寿命をマイナスした値が、「日常生活に制限のある健康ではない生存期間」ということになります。

厚生労働省は、この健康寿命を何とか引き上げようとするさまざまな方針を打ち出しています。高齢者自身も、人間ドックや健康診断を定期的に受け、体調

最近では、ちょっとと大きな病院に行きますと、ほとんどがCTスキャンを設置していることに気づきます。人体に多方面からX線を照射することによって得られる人体の横断面の画像を、コンピューター画面の上に映し出して病変部を発見するための装置です。

これもOECDの国際比較調査から得たデータですが、驚いたことに、人口百万人当たりのCTスキャン設置台数は、日本が世界でだんとつに高い一〇〇・二一台となっています。ちなみに第二位のオーストラリアは六三・二台、第三位のアメリカは四一・九台です。

私の身内の多くが高齢化して、何人かが死期のしばらく前から、中心静脈栄養の輸液、胃瘻による水分栄養補給、人工呼吸器、人工透析などの生命維持装置のお世話になり、そうして死んでいきました。QOLという言葉があります。「生活の質」と訳されていますが、むしろ「生命の質」といった方が

私はいいと考えています。これらの生命維持装置により、高齢者の「生命の質」は大きく劣化しているのではないか、と私はみています。治癒の見込みもないのに、ただ生命期間を引き延ばすためだけの手段なのであろうと、私は経験上感じています。

日本人の平均寿命はくどいようですが、日本の歴史上最高で、かつ世界でトップクラスです。この日本人の長命の人々の中には、まさに不幸なことに、中心静脈栄養、胃瘻、人工呼吸器、人工透析、その他の生命維持手段によって、ただ生命の時間を引き延ばされているだけの人々が相当数いるのではないかと思うので、自然生命体としての則を超えて延命を図れば、これは「生命の質」を決定的に落としてしまうことが容易に想像されます。

これからさらに平均寿命を男性八五歳、女性を九〇歳にまで伸ばすことができるなどという人もいるようですが、それでは人生の最期を実際に滅々たるものとせざるを得ないのでしょうか。八〇

歳まで生きて、身内や友人の苦しく切ない最期を何度もみてきた私の実感です。

老いれば老いるほど生への執着が強まる、という心理を私が知らないではありません。しかし、老いとともに深まる生への執着が、例えば癌恐怖となり、これが現代の医療と結びついた時には、人生の最期が過酷なものとならざるを得ない、という予覚だけは失うまいと私は構えています。

人間が自然生命体である以上、いざれは病死んでいかざるを得ません。歳をとつて、なおパーエククトな身体など存在しないのですから、神経質に健康を追求し始めるや、われわれが不安と恐怖に囚われ、その頻度が増して、老人性の鬱に陥つたり、ひどい場合には強迫神経症になる確率は、かなり高いのではないかと思われます。

「健康の中に不安があり、不安の中に健康がある」と構えることが、成熟した人間の死生観なのだと私は考えます。

健康への強いこだわりは、結局のところ、不安と恐怖に帰着する、という人間存在の「背理」を、日本の精神医学の創始者、私の心の師・森田生馬は教えています。

最近、「人生一〇〇年時代」といふ方をよく耳にするようになりました。私は今年八〇歳になります。六〇歳を過ぎたところで医療健診の受診を一切やめておりません。調べればどこかに治療した方がいいところがみつかるのでしきうが、ここまで生きた以上、もう受診などをやるつもりはまったくありません。一〇〇歳まで生きることなど想像さえしたことがあります。

厚労省が「人生一〇〇年構想会議」を既に数回開き、さまざまな議論をやっているのだそうです。叶えられないことを叶えられるかのよう、しかも政府が主導して「人生一〇〇年時代」などといつていものかどうか、私には大変疑問に思われます。令和の新時代です。こういうポピュリズムから脱する

必要があるのでないか、と私は思うのです。

(拓殖大学学事顧問)

